

「歴史探訪・新湊の北前船文化遺産 - 大楽寺の宝物を通して - 」

講師 大楽寺住職 田村 晴彦 氏



1 . はじめに - 大楽寺の編鐘

大楽寺には、日本に三つしかない特別な編鐘（中国の楽器）がある。ほかに東京国立劇場、京都大原三千院にあるが、この音色は京都の職人が工夫・研究され、最後に天台宗の声明(しょうみょう)の先生が音律を調整され、二十数年前に寺の宝物の一つになったものである。私はこの音色を若いときからあちこち探し求めたが、高岡の銅器屋にはことごとく断られ、あるとき京都の伏見駅前の仏具屋に教えられ、作者が70歳過ぎでもう駄目といわれたところを、無理をお願いして、先代の大楽寺の住職、田村哲山氏が私に住職を譲るに当たっての記念として檀家の方々の支援で作っていただいた。心は言葉ではなかなか伝わらないが、自分を育ててくれた両親の深い恩などを、この音色を聞きながら自分の心に呼び掛けていただければと思っている。(事務局補足；本堂内に編鐘の音色が響き渡る。)

今日は北前船の話を中心に、思いがけない富山県の素晴らしさと、この寺の成り立ちを紹介し、そこをきっかけに、私たちが今後どう生きていけば心が豊かになっていくかということをしっかりと受け止めていただければと思う。

2 . 北前船廻船問屋の心意気と大楽寺

最近何年間か前より、水橋、岩瀬、伏木が北前船をテーマにして、一生懸命町おこしをしている。大阪も海王丸は富山に譲って菱垣廻船を自前で造ったが、和船を造る材料や大工を用意し、作る経過を記録して地域としての大切な足跡を残そうということは全国の他の寄港地でも行っている。

伏木には望楼のある秋元家を改装して、北前船資料館ができた。富山県では、民間と県職員で北前船について勉強していこうという日本海北前口マン回廊構想があり、副会長の松下ナミ子先生が書かれた俳句の中にも「北前の望楼百年夏の海」とある。望楼とは、2～3階建ての所に窓があって海が見え、目視や望遠鏡で「北前船が来たぞ」と伝令するためのものである。今は富山新港にいろいろな船が来ても、テレビや新聞にはよほどのことがない限り載らないのでみんな行かないが、江戸時代や明治のころはその伝令で、ラジオやテレビより早く何十人、何百人と押し寄せて船の出迎えをした。そして新湊、伏木、岩瀬、水橋の廻船問屋の従業員が笹舟で荷を受け取りに行き、皆で迎えて浜が活気付く。望楼からは沖遠くに点が一つあってもよく見え、旗印でどこの船かが分かった。北前船は江戸時代中ごろから明治の半ば過ぎまであり、司馬遼太郎は「北前船は船の中の王」という表現をしたが、日本の海運や諸外国との交通・流通の面、文化面で後々まで大変素晴らしい業績を残した。

北前船は岩瀬の方ではバイバイ商売でもうかる「バイ船」といわれたが、乗っている方々は船底1枚でいつ何どき沈没・遭難するかもしれず、船頭が自分さえよければいいとなると乗組員も責任を持たないので、船乗りだけにしか分からない男意気があった。

その典型例が藤井能三という伏木の廻船問屋で、北前船で得た資金で世のため人のために尽くした。例えば東京から教師を自費で招聘して女子のための小学校を作り、またお宮さんの常夜灯を大きくしたような、菜種油を燃やす江戸時代の薄暗い灯台を、明治時代に改修して新しい灯台を建造した。

また、明治2年に新湊で大火災があり、高瀬という宮大工がヒノキで造った素晴らしい本堂が全部焼けたが、大楽寺の総総代であった能三は伏木、新湊、富山の関係者に声を掛け、二度と火災を受けないよう漆喰土蔵づくりの本堂を再建した。このときは多くの漁師、百姓もケヤキ材やヒバを持ち寄って協力した。この後、明治33年に高岡の山町筋が火災で焼けてすべて土蔵になり、その後、国の重要伝統的建造物群保存地区の指定を受けたが、その30年近く前に漆喰土蔵の本堂を見事に造っていたわけである。

この本堂は浄土宗総本山知恩院の、法然上人がいた勢至堂の設計に合わせて造られた。富山県は浄土宗寺院が少なく、開祖の法然上人が亡くなって平成23年に御恩忌800年を迎

えるが、実はこの寺の歴史は 1000 年以上で、さらに古い。古文書の記録を見ると、天平時代に高岡の姫野に小高い山があり、地方の王が大長徳寺という寺を建てたのが始まりで、今の新湊高校周辺にこの寺の飛び地が多く残っている。



3 . 阿弥陀像から分かった海運ネットワーク

私は 10 年ほど前に小矢部市の主催で、昔の北陸道を小矢部から津幡に山越えしたが、幅も非常に狭い山道を上り下りして着くと、ほとほと疲れた。平坦地ではないので、昔はせいぜい馬 1 頭で、荷を背にして輸送していた。輸送・交易は大切な事柄だが、江戸時代に急に北前船が出てきたのではなくて、陸路の事情もあって富山県には、鎌倉時代から交易船が走っていたのだろう。大楽寺の御本尊である鎌倉時代作の阿弥陀さまも、京都から船で運ばれた。御本尊前立ちの小ぶりの阿弥陀像は室町時代の藤花一族の守り仏で、両脇の仏は江戸時代のものである。

話は変わるが、滋賀県信楽町にある玉桂寺の阿弥陀仏像は 1 m ほどの高さで、滋賀県の真言宗のある寺のお堂の中に入っていたのを、ご住職が移動されたところ、妙な音がするので、町の教育委員会で調べたら、中に数万人の名前が書いてあった。文化庁の調査で、この仏さまは、浄土宗を開かれた法然上人が建暦 2 年(1212)正月 25 日に亡くなられ、その一周忌をしたいと勢観房源智上人が中心となって作ったものと分かった。彼は、平家の一族で、ほかは皆、源氏の武将に殺されてしまったが、法然上人の門下に入っていたので命が助かり、子どもの時から法然上人に仕え、浄土宗総本山知恩院の第二祖となっている。その彼が法然上人の一周忌に鎌倉幕府や天皇に願って寄付を集め、1 年間に数万人の

浄財者の名前を書き記し、快慶の弟子が作ったといわれるこの阿弥陀像の胎内に入れた。その中には数千人の越中の方々の名前や、アイヌの方々の名前まであり、今では信じられないほどの信仰があったことと、1年以内に大切なものが日本国内に伝播して心を一にするということが行われたことが伺われる。これも単に陸路だけでなく、既に鎌倉時代には越中の新湊から青森まで海路が開かれており、交易船が幕府の了解の下に走っていたという積み重ねが流れとしてはあったからだろう。

しかし、残念ながら江戸時代に入ると、徳川家康が500石以上の船は作るなという指示を出した。室町時代から秀吉の時代の日本も含めて、世界中が海運を盛んに進めていたのに、江戸時代の日本だけが閉鎖的な政策を採った。ただし、それなりに技術は持っていたようで、ペリーが江戸時代の終わりごろに来て、大きな船に江戸末期の町民たちがびっくりしたということを素直に受け取っては駄目で、実は外国へ行けるような1500~2000石ぐらゐの船を造る技術を持っていたにもかかわらず、それが江戸幕府によって消されてしまったということである。

4 . 北前船と交易の発展

しかし、江戸時代中期になると、自分たちの地域だけでは米の飢饉もあるし、やはり貿易や流通を国内外でしていけないと駄目だとだんだんと分かってきた。

ちなみに、富山県の有名な環日本海地図は日本が逆さになっていて、よく見ると富山が中心でロシア、中国があり、日本海が内海のようにになっている。今日は東海北陸自動車道が開通したが、名古屋方面は大消費地で今は東京や大阪より景気がいい。名古屋方面での関心は今、富山新港からのロシア・中国で、



経済の活力は、資源のある所にアリが群がるようになってきている。ロシアや中国は、石油その他の資源では今後50年100年、アメリカより経済力が高い国になるといわれ、富山からロシア・中国等と交易できるのではないかと中沖前知事が全国に発信された。

実はこの地図より百数十年前の江戸時代にも、富山県が中心の逆さ地図は、伊能忠敬や新湊の石黒氏のほかにもいろいろな人が描いている。このような地図を何枚も頭に入れながら、北前船の廻船問屋の経営者や船頭たちは航海していた。今の千島列島やロシアの北方には、当時は現地の人々が住んでいたが、ロシアが、中国を上手に攻略して国を樹立した。竹島問題も既に江戸幕府のとき、朝鮮といろいろ論争になったことが歴史に残っている。江戸後期になると勝海舟も逆さ地図を編集しているが、自分たちの大切な北前船という財産を何艘も持っている人にとっては地図 1 枚では心許なく、高田屋嘉兵衛などもたかさんの地図を持っていた。

江戸時代、北前船の航海で求めていたのは北海道の物産で、明治時代に新湊から北海道へ移住した人もいて、「新湊町」もあるそうだ。北海道はニシンが捕れるが、食用ではなく綿、木綿の肥料にする。さらに、コンブもある。また、中国からロシアを通じてアイヌに渡ってきた絹織物が北前船で京都、大阪、江戸へ来たらしい。コンブは栄養もあり、漢方薬として使用された。これは東京の出版社が鹿児島辺りを調査して分かったことだが、薩摩藩が城の修復や参勤交代の費用で財政が緊迫していたとき、越中の薬屋と手を組んで北前船でコンブを仕入れ、越中の売薬屋は特別に許されて、沖縄を通じてコンブを中国に出したそうだ。その名残か、全国でコンブの消費量が一番多い所は富山県だが、コンブが健康にいいと中国で非常に高価に扱われ、中国のお金が日本で流通したこともあった。逆に中国のいろいろな珍しいものが琉球を通じて薩摩藩に渡り、徐々に財力を整えて鉄砲などを用意し、明治維新に至ったきっかけになったともいわれる。

日本の和船は、遠洋航海は非常に苦手で、嵐に弱く、残念ながらスピードがあまり出ない。外国の船はスピードを出すため、帆を何枚も出して少しでも風を受け止めて進める工夫がいろいろされているが、日本の場合は帆が一つだった。わざわざ江戸幕府がそのような指導をしていた理由は、秀吉のときは海外に遠征して朝鮮まで侵略しようとしたが、徳川家康も松平家も浄土宗に帰依していて、法然上人の教えは外とのいさかいはなくし、この世の中を極楽浄土のようにしようという考え方であったことと、江戸の芝には港があり、もし九州や瀬戸内海の水軍などが攻めてきたら、国内が混乱し、戦乱になる恐れがあったためである。このようなことから、500 石以上の船は作るな、帆も何枚も上げるな、形も最新式のものを工夫してはいけないなどと制限したのである。

その中で北前船は、江戸回り、瀬戸内海回りの船より非常に頑丈で、日本海の荒波も逃げ切れる材料を使った。木造船は当時の外国船と違って、下回りには銅板を打っていないので、虫が入って木を食おうとする。富山県や石川県には、修復・修理をする所はあまりなかったようで、冬から春にかけて瀬戸内海や大阪から陸路に上げ、ワラや杉の煙で木食

い虫を退治し、何カ月間か修復して、また春過ぎから北前船で日本海を航海した。最初に北海道への航路を開発したのは近江商人であったといわれる。近江商人は鎌倉時代から京都のお公家さん方の古着を回収して商売し、福井や富山、青森、北海道へ持っていったという史誌が残っている。北前船は突如出てきたのではなく、鎌倉時代以前から船の交易が必要になった背景があったと思われる。

5 . 大楽寺のコレクションと萬善大僧正

大楽寺のコレクションはたくさんある。先人が真心をもって作られたものを一つのきっかけとして受け止めていただければいいと思い、集めている。

(事務局補足 ; 以下、当日用意されたコレクションを紹介しながらの話)

1 番目の「マニ車」は、愛知万博のためにネパール政府が何年もかけて作ったもので、中にネパール語の観音経が入っており、金色の筒にはお経の文字が書いてある。平和を願い、相手を思いやりながら、下の木の所を一回転させる。

私たちは年金が少ないと思っても、中国の奥地その他途上国では年間 2 ~ 3 万円、1 カ月 1000 ~ 1500 円の収入で、そういう安い賃金の方々の犠牲の上にわれわれの生活は成り立っている。また、ダイヤモンドの取れるアフリカでは、7 ~ 8 割の方々が食べ物も薬もない。そういう地球上での経済上のバランスを欠いているのが今の状況だ。また、以前私も外国の方と職場でお付き合いしていたが、履歴書にはキリスト教の教会でどのような奉仕活動をしていたかという項目があり、飛行機で 2 時間かけて行って月 1 回、日曜学校で子どもたちに教えたり、草むしりをしているなど、これがないと相手は信用してくれない。お金だけでなく、目に見えないものを大切にする。アメリカ人の多くは素直にキリスト教を信じているし、イスラムも宗教を信じ、日本だけがお金や物に振り回されている。物は豊かなはずなのに、さらにもっともっと欲しいという考え方を、変えていくことは本当に大切ではないかと思う。

2 番目に、地獄絵がある。戦前までは親や年寄りが子どもをお寺参りに連れてきて地獄絵を見せ、「悪いことしたらあかんのやぞ。うそをついたらあかんのやぞ」「うん、じいちゃん、ばあちゃん、分かった」と言って、分からないなりに分かったのである。

3 番目に、四百数十年前の室町時代の「十王図」11 幅や、北陸 3 県で唯一残る「熊野勸進十界図」がある。

4 番目は、「南無阿弥陀仏」と記された大幅(浄土宗総本山知恩院 71 代御門主萬善顕道上人直筆の名号大幅)である。徳川家・松平家の菩提寺は浄土宗で、大本山は長野の善光寺、鎌倉の光明寺、九州の善導寺、東京の増上寺と幾つもある。その頂点が京都の総本山

知恩院で、大本山では「御法主(ごほっす)」、総本山では「御門主(ごもんす)」が浄土門の最高責任者である。江戸時代は身分・格式が厳しく、真宗の西本願寺・東本願寺は天皇家と姻戚関係を次々結んだが、日本海側から総本山知恩院の御門主になった人は、現時点でも 71 代御門主の萬誉だけである。大僧正の出身は、新湊の十村役礼遇、米田家一族で、3 歳頃より、大楽寺 24 世勅衣上人禅誉の弟子となった。大楽寺の歴代住職は、加賀前田藩の士族や郷土、豪農の次男が多かった。郷土とは、江戸時代の初めに身分の高い侍が豪農となった、身分のある方々である。

この萬誉大僧正は鴻巣の勝願寺の住職になっていたが、ここは関東十八檀林として、今で言う大学であり、僧が約 600 人いた。萬誉はここで時々、将軍や天皇の国際的な相談にも乗っていたことから、嘉永年間に知恩院の御門主が亡くなり、皇族と縁の深い光明寺が順番だというとき、天皇や将軍の特別な指示で越中放生津の萬誉が知恩院大僧正になられた。その後も欧米やロシアとの対局で日本は大揺れだったが、萬誉大僧正は天皇と将軍の間を上手に調整し、各国が日本に無理難題を言ってきたとき、開国の立役者となったといわれる。萬誉がこのように国際情勢に明るかったのは、大楽寺のいろいろ部屋で、北前船の廻船問屋たちがいろいろ情報交換していたのをずっと聞いていたからではないかと思われる。

萬誉の大僧正就任には加賀藩も大変喜び、大楽寺の住職は従来よりその格式で 2 台の菊のご紋章入りのお籠に乗ることを許されていた。当然、僧の世界でも自分の立場をよくするため師匠替えをしていくことが多いが、萬誉大僧正はその後も「出身は大楽寺」と言い続け、十万石の大名行列で帰郷したとき、師匠の法要と亡き父母の供養のため「南無阿弥陀仏」と書かれたのが例の大幅である。この花押は顕道名の下にタコ入道の足のような珍しいものである。これには新湊の浜でイカやタコと遊んで、三～四歳からこの弟子になったのだという思いが伺われるが、とにかくこの放生津や富山県を非常に大切にした。

ちなみに長崎で蘭医学を勉強した江戸時代の人ややはり北前船で戻ってきて、この寺で新湊の方々の病気を無料で治療した。また、漢方で有名な大阪の道修町の小さなお宮には薬問屋の人たちがお参りするが、売薬や北前船を通じて、いろいろな人の心を大切に敬う心を今日にも伝えている。

5 番目は、「阿弥陀経变相図」である。観無量寿経を絵にしたものは結構あり、春秋のお彼岸に掲げられるが、阿弥陀経を絵にしたものは大変珍しい。これも北海道の松前藩から伝えられたもので、萬誉大僧正が母に贈ったものを米田家が大事に保存されていたのを寄進していただいた。

6 . おわりに

越中の方々の名前 4000 人分が 1 m の木彫りの仏様の中に入っていたというのは 800 年近く前の古文書だが、和紙は世界一保存がよい。ちなみにその紙を発明したのは中国である。中国が欧米の資本主義に負けないで頑張ったら、アメリカ以上の国力を持つであろう。この日本海側の伏木港や富山新港にしても、横浜から見たら寂しく、船が来てもみんな歓迎しない。しかしこれからは中国やロシアなどと交易が盛んとなり、船の船長が「富山県へは寄らない」と言っても、船員たちが「船長、ぜひ富山に寄って富山県民と楽しみ、歌を歌い、歴史と政治を語り合しましょう」というようになればいいと思う。

(事務局補足；以上の講義のあとで、参加者全員が田村住職の念仏の中、浄土宗の数珠くり(百万遍念仏)を宗教、宗派を問わず体験した。下の写真。)

